

ひきこもり経験者を対象とした ケースコントロール研究 — 高校時代の学校での経験について —

北海道医療大学
看護福祉学研究科博士後期課程
米田政葉
(会員番号:008824)

ひきこもりとは

① 社会的参加の回避

– 就学・就労・家庭外での交遊等

② 自宅内での閉じこもり

– 原則的には6カ月以上継続

– 対人交流の無い外出は閉じこもりに該当

※ 統合失調症によるものは除外

ひきこもりの概要と特徴

- 推計数

- 15～39歳：54万名程度(内閣府, 2016)

- 40～64歳：61万名程度(内閣府, 2019)

- 特徴

- 男性に多い

- 長子に多い

- 初発年齢に二峰性(15-18歳・20-22歳)がみられる

- 自閉症スペクトラム障害の該当率が高い

(斎藤1998; 東京都2008; 内閣府2010; 土岐・谷山・衣笠2011)

ひきこもり状態により発生する諸課題

本人の問題

心身の疾病発症リスク増加
QOLの低下

(John W. M. Yuen, et al 2018;
小山他2007;野中他2014)

家族の問題

親のストレス増・家庭内不和
8050問題

(NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会2005;
勝部2015)

➡ ひきこもり状態の発生は本人や家族の心身の健康の
大きなリスクとなりうる

➡ ひきこもり予防は喫緊の課題である

目的

• ひきこもり予防

- 幼い頃からの生活リズムを整える(森他2007)
- 中学卒業後や休学を含む高校生活中断後に、早期に関われる機関および人間関係の存在が重要(原口他2007)
- 中学・高校・大学におけるつまずき段階での早期対応(中地2016)

➡ 横断研究・事例研究が中心であり、十分なエビデンスがない。

➡ ひきこもり好発年齢である高校時代の学校での経験に着目し、ケースコントロール研究を行い、先行研究よりもエビデンスレベルの高いひきこもり予防への示唆を得る

対象・期間・方法

- 調査対象：
 - ひきこもり経験者：31名(道内の支援機関を利用したもの)
 - ひきこもり非経験者：31名(性・年齢(±3歳)をマッチング)
- 調査期間：2018年4月～2019年12月
- 調査方法：他記質問紙を用いた構造化面接
- 調査項目：
 - ひきこもり経験：1項目
 - 基本属性：4項目
 - 学校での経験：15項目
- 分析方法：項目ごとの条件付きロジスティック回帰分析(ひきこもり経験の有無を目的変数、学校での経験を説明変数に設定、性年齢で調整)
- 本研究は北海道医療大学看護福祉学部看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った：承認番号16N040039

基本属性

- 性別
 - 男性23名(74.2%), 女性8名(25.8%)
- 年齢
 - ひきこもり経験者: 32.3 ± 7.8 歳,
 - 非経験者 31.9 ± 7.1 歳
- 平均ひきこもり初発年齢
 - 19.6 ± 6.4 歳(7歳–37歳)
- 平均ひきこもり期間
 - 6.1 ± 4.9 年(6ヶ月–16年)

ひきこもり経験と高校時代の学校での 経験の関連

	OR	(下限値 - 上限値)
1 友人がいなかった	7.80	(0.95 - 63.91)
2 話し相手がいなかった	7.80	(0.95 - 63.91)
3 悩みを相談できる人がいなかった	5.85	(1.72 - 19.87)
4 困ったときに頼れる人がいなかった	5.24	(1.51 - 18.16)
5 いじめをしたことがない	0.50	(0.05 - 5.51)
6 いじめを受けたことがある	2.86	(0.76 - 10.86)
7 いじめを見て見ぬふりをしたことがない	1.27	(0.44 - 3.68)
8 授業についていけなかった	2.25	(0.69 - 7.31)
9 成績が悪かった	2.33	(0.60 - 9.02)
10 教員との関係がよかった	0.89	(0.18 - 4.48)
11 クラスに居場所がなかった	3.19	(0.88 - 11.62)
12 学校(クラス以外)に居場所がなかった	9.53	(1.22 - 74.56)
13 保健室登校の経験がある	4.70	(0.52 - 42.78)
14 不登校の経験がある		-
15 受験に失敗した	4.00	(0.45 - 35.79)

考察

ひきこもり状態の予防に向けて

1. 悩み事を相談できる人や頼れる存在
2. 学内に居場所だと思えるところがあることが重要である可能性が示された

おおむね先行研究(天野2003:濱島2014)を支持する結果であった。
Alexander.K・Jane.D(2013)は思春期前期における対人関係の重要性を指摘しているが思春期後期にあたる高校生でも同様である可能性が示唆された

本研究の結果から、ひきこもり予防に向けて

- ① 友人関係を作り保つことができるような支援体制づくり
- ② スクールソーシャルワーカーやカウンセラーなどの拡充と活用
- ③ 学内における教室以外の居場所づくり
が重要であると考え。

有効性と限界・課題

- 有効性

- エビデンスレベルの高いひきこもり一次予防への示唆を得ることができた

- 限界

- ケースのひきこもり時期が異なる

- ケース群について、一定程度社会参加しているものが対象

- 課題

- サンプルサイズを増やし詳細な検討を行う

- 頼れる人や相談できる人について実際にどのような人がよいかに関する検討を行う